

子どもの愛着と人間関係に関する一考察

——非組織型の子どもの理解と対応をめぐって

松本 真理子

要旨

これまで、乳児のアタッチメントタイプのひとつである無秩序・無方向型;D型アタッチメントはよく知られてきたが、その後のアタッチメント研究の発展により、幼児のD型アタッチメントは表現型が異なることがわかっている。そこで、本編では、非組織型の愛着スタイルをもつ子どもの、問題行動へと至るメカニズムを愛着理論研究から整理する。そして、園内の、非組織型の幼児の対人関係トラブルの特徴について述べるとともに、子どもの心理、対応の在り方について検討する。

キーワード: 愛着 アタッチメント 無秩序・無方向型 非組織型 安心感の輪
有標的ミラリング

1. 問題

子どもは、子どもにとって初めての社会である幼稚園・保育所・子ども園において、保育者と人間関係を築き、そこでの安心感を基盤に他児との関係を広げていく。順調な愛着の形成は、子どもの生涯にわたる人間関係の持ち方に深くかかわるとされ、乳幼児期の重要な発達課題である。しかし、安定した愛着を形成している子どもは世界的に全体の65%と言われ、安定型の愛着形成ができる子どもばかりとは限らない。保育者が子どもの状況に細やかに反応し、あたたかい関わりを提供しても、なぜかかえって怯えたり、攻撃的な行動に出たりする子どももいる。

ストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure, 以下、SSP と略す。) で知られるエインズワースの愛着のタイプは、生後12ヵ月から24ヵ月までの子どもの反応型であって、幼児期以降には異なる行動として表現されることはあまり知られていない。本稿では、このような非定型の愛着パターンを示す子どものうち、無秩序無方向型—「D型」と呼ばれる幼児の行動特徴をとりあげ、そのような行動に至る子どもの心理を解説する。愛着理論の観点から、望ましい保育および援助のあり方について検討する。

なお、現在、発達心理学および社会心理学においては、旧来の訳語である「愛着」とは区別して「アタッチメント」という用語を使うことが主流になっているが、多くの幼稚園教諭養成課程の教科書では「愛着」という用語が使用されているため、本論では「愛着」という用語を使用する。

2. 愛着理論とは

愛着とは子どもが養育者との間に結ぶ情緒的絆のことである。愛着理論(アタッチメント理論)を構築したボウルビー(J.Bowlby,1979)によると、乳児は外界の危険から生き延びるために、自分の世話をし、保護してくれる人物に接近・接触を求める。原語の attachment には、「くっつく」という意味がある。くっつくことを可能とするために乳児が示す実際の行動はアタッチメント行動と呼ばれる。具体的には、乳児側から能動的に行う行動—すなわち、<吸う、しがみつく、後を追う>と、養育者側からの世話や保護を誘発するもの—すなわち、<喃語、泣く、微笑む>といった行動である。

こうした、アタッチメント行動の制御と愛着対象の選択を、ボウルビーはアタッチメント行動システムと呼んだ。このシステムを活性化させる要素には大きく分けて三つある。①空腹・疲れ、けがや病気といった生体の弱った状態 ②大きな音、暗闇、見知らぬ場所、他の動物の存在といった危険のある環境 ③愛着対象の利用不可能性(愛着対象が見える所にいない、声が聞こえない、応答性が低いなど)である。すなわち、乳児にとって個体の危険がある時にはアタッチメント行動システムは活性化し、アタッチメント行動を引き起こす。乳児においては、<泣く>という行動が起こり、心的苦痛が表明される。外界の危険に対する驚き、養育者の利用可能性が得られないことへの不安、恐れといった情動が経験される。

このことは、養育者の反応を引き起こす。養育者は乳児のそばに寄り、抱き上げ、言葉をかけ、あやし、危険から離し、乳児を落ち着かせる。すると、乳児のアタッチメント行動システムは沈静化し、安心感がもたらされる。これを養育者側の養育行動システム caregiving behavior system と呼ぶ。乳児側のくっつくことと養育者側の世話することの調整は、二つの行動システムによって行われているのである。

この相互作用は日々繰り返しの中で、子どもの中に内在化される。自分が発するシグナルに対する養育者の応答が、記憶され、予測され、それに沿った行動が選択されるようになる。養育者との関係性や情動の特徴を自分のなかに位置付ける精神活動を内的作業モデル (Internal Working Model) と呼び、子どもがその後周囲と人間関係を持ったり情動調節を行う土台となる。この移行、つまり内的作業モデルの成立は、5歳前後までに行われるとされている。

安心感の輪

このアタッチメント行動システムを子どもの行動をもとに図で表したものが「安心感の輪」である。図1の輪の左側の手が、子どもにとっての養育者を表す。家庭では母親、園では特定の保育者となる。子どもは、この養育者を「安心基地」として、情緒的なエネルギーの補給を得て外の世界を探索する。それが遊びであり学びであり、生きる活動そのものとなる。しかし、転んで痛い思いをしたり、不安に駆られる、思い通りにならず不満を覚えるなどして「危機」を経験すると、アタッチメント行動システムが活性化する。すると、養育者を安全な避難所としてそこへ

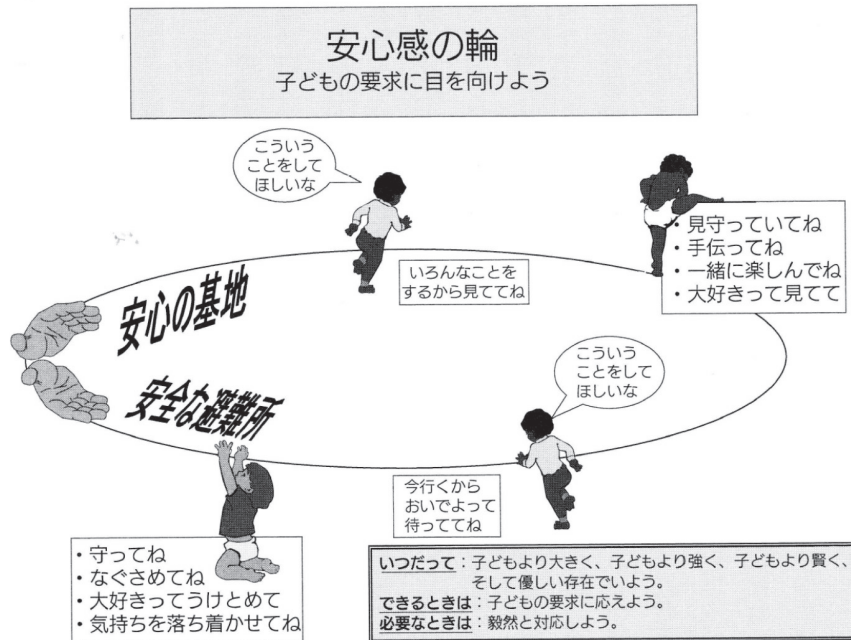


図1 安心感の輪

Web page:Circleofsecurity.org © 2000 Cooper, Hoffman, Marvin & Powell (北川・安藤・岩本訳, 2013)

移動する。

この図は、養育者向けの支援プログラムで使われているもので、養育者が子どもの愛着のあり方を視覚的に理解するうえで優れているとともに、養育者や支援者が援助・介入するうえで重要な道しるべとなるものである。

3. 子どもの愛着の個人差タイプ

生後6か月頃に、乳児は特定の人物をアタッチメント対象として選び始め、生後12か月になるころには、情緒的絆を結ぶようになっている。この頃には、乳児は特定の養育者との間に特定の行動パターンを形成する。エインズワースがSSPを実施したのは、この時期の乳児達である。

SSPには、各3分間からなる、8つの場面が設定されている。分離と再会の手続きが含まれており、この二つが乳児のアタッチメントシステムを活性化させる。①養育者と乳児が実験室に入る。②養育者は席につき、乳児を部屋のおもちゃで遊ばせる。③見知らぬ他者が入室し、乳児と関わる。④養育者が退室する。⑤養育者が戻ってきて、見知らぬ他者は退室する。⑥もう一度養育者が退室する。⑦見知らぬ他者が入室する。⑧養育者が戻ってくる。というものである。

この観察手続きから、当初は3つの、そしてのちの研究者たちにより新たにもう一つのパターンが分類され、4つのパターンが分類されるようになった。愛着の個人差のタイプとしてよく知られるものである。(表1)

表1 組織化されたアタッチメントと未組織状態のアタッチメント

		子どもの特徴	養育における親の特徴
組織化されたアタッチメント	好避型 (Secure: B型)	SSPでは、分離時には多少の泣きや混乱を示す。再会時には積極的に養育者に近接、接触し、沈静化する。不安なときに養育者などに近接し、不安感をやわらげる。養育者を安心の基地として使っている。	子どもの欲求や状態の変化に敏感であり、子どもの行動を過剰に、あるいは無理に統制しようとするのが少ない。また、子どもとの相互作用は調和的であり、親もやりとりを楽しんでいることがうかがえる。遊びや身体的接触も、子どもに適した快適さでしている。
	回避型 (Avoidant: A型)	SSPの分離時には、泣いたり混乱を見せることはほとんどない。おもちゃで黙々と遊んでいる。ストレンジャーとも遊んだりする。再会時に養育者を避けるか、ちらっと見る程度である。 ある程度までの不安感では養育者には近接しない。養育者を安心の基地として使わない。	全般的に、子どもの働きかけに対して拒否的に振る舞うことが多いが、特にアタッチメント欲求を出したときにその傾向がある。子どもに微笑んだり、身体的に接触したりすることが少ない。また、子どもの行動を強く統制しようとする関わりが、相対的に多く見られる。
	アンビバレント型 (Ambivalent: C型)	SSPでは、分離時に強い不安や泣き、混乱を示す。再会時には積極的に身体接触を求める。一部は求めながら、養育者をたたくなどの怒りを表す。抱き上げるとのけぞり、おろせと言う。全般的に不安定で用心深く、養育者に執拗に接触していることが多く、安心の基地として離れて探索行動を行うことができない。	子どもの信号に対する応答性、感受性が相対的に低く、子どもの状態を適切に調整することが不得意である。応答するときもあるし、応答しないときもある。子どもとの間で肯定的なやりとりができるときもあるが、それは子どもの欲求に応じたというよりも、親の気分や都合に合わせたものであることが多い。結果として、応答がずれたり、一貫性を欠いたりすることが多くなる。
未組織状態のアタッチメント	無秩序・無方向型 (Disorganized/Disoriented: D型)	SSPでは、近接と回避という本来成り立たない矛盾した行動が同時に起こる。不自然でぎこちない行動、タイミングがずれたり、突然すくんでしまったりと、行動方略に一貫性がない。養育者に怯えているような素振りを見せることもある。初めて出会う実験者やストレンジャーに対して、親しげで自然な態度をとることがむしろ少なくない。	養育者が、子どもにとって理解不能な行動を突然とることがある。たとえば、結果として子どもを直接虐待するような行為であるとか、あるいは、訳のわからない何かに怯えているような行動であるとかする。そのような子どもにとって訳のわからない親の行動や様子は、子どもに恐怖感をもたらす。そのため、子どもはなすすべがなく、どのように自分が行動をとっていいかわからなくなり、混乱する。

注：SSPとは、ストレンジ・シチュエーション法の略である。

「B型:安定型」は、養育者を安心の基地としてうまく使い、情動調節においてもすぐに切り替え、適応的に行うことができる。「A型:回避型」は、アタッチメント欲求を養育者に向けてと対応されない、無視されるという学習から、アタッチメント欲求を抑え込む。いわば最小化方略を身につけている。他方、「C型:アンビヴァレント型」は、養育者の都合で対応してもらえるときと対応してもらえない時があるため、アタッチメント欲求を最大に出し続けることで対応を促そうとする。最大化方略である。この3つのタイプは、不安が生じた時、それぞれが身につけた一貫した方略を持っているという意味で、「組織化されている」と考えられる。しかし、未組織状態である「D型:無秩序・無方向型」は一貫した方略を持たず、不安が高じるとパニックになったり奇妙な行動をとる。行動のまとまりがなく、一貫性がない。養育者にくっつきたいのか、離れたいのかよくわからない、どっちつかずの行動を示す。乳児段階では、「ぼーっとする」「うつろになる」「かたまる」「すくむ」といった姿である。(遠藤, 2017)

当初、3つのA、B、C型が分類されていたが、Mainと共同研究者らによって、行動が一貫

しないD型が発見された (Prior & Glaser, 2006)。D型の乳児期の行動の特徴として、以下の7つが挙げられている。1) 互いに矛盾する行動パターンの経時的表出 2) 互いに矛盾する行動パターンの同時的表出 3) 方向性のない、不完全な、中断する行動や表出 4) ステレオタイプ、非対称的運動、タイミングのずれる運動、変則的姿勢 5) フリージング、静止、方向性を欠く無気力な運動・表情 6) 親に対する心配の直接的指標 7) 無秩序または無方向の直接的指標 である。7) は特に、母親への分離の場面で、後を追ひ、分離に抵抗するが、ドアが閉まると、ドアに向かって微笑み、再会した時には、混乱と恐怖を示す、という。

D型(無秩序・無方向型)の多くは虐待されている子どもたちに認められる。被虐待児の8割から9割がこのタイプの子どもたちであるとされる。本来、子どもは怖くて不安な時には安全基地である養育者のもとに戻っていく。しかし、その安全基地であるはずの人が、自分に危害を与える、恐怖そのものであったら、子どもは怯え、その人にくっつきようがない。Mainらは、この事態を「解決のない恐怖」と呼んだ。そうした引き裂かれた状況で、くっつきたいのか離れたいのか、どうすればよいかわからず、組織だった行動方略をみつけられないままなのである。

4. D型の子どもの園での行動傾向、対人関係の特徴

4歳くらいまでの子どもの問題行動は可塑性が高く、その時々状況の影響を受けやすいが、5、6歳頃になると、問題の内在化が起り、持続的な問題行動という形で根付いていく。メインらによると、乳児期に上述の、無秩序・無方向のアタッチメント行動を示していた子どもたちの中には、5～6歳には、養育者に対して統制的なアタッチメント行動をとるようになる子どもたちがいる (Prior & Glaser, 2006)。養育者を叱りつけるような行動をとる「統制的一処罰タイプ」と子どもながら養育者を気遣い世話しようとする「統制的一世話焼きタイプ」である。前者は、懲罰的で、命令をし、言葉で脅し、身体的攻撃で親を見下し、服従させる。Mossらがあげる実験室での事例を紹介すると、「5歳の男児は、母親と離れて遊んでいるとき、扱いの難しい玩具に不満を募らせ、その玩具を壁に向かって蹴りながら母親を呼びつけました。ところが、母親が部屋に戻ると、男児は母親に『出て行け、出て行け』と叫び、母親は部屋を出て、廊下の椅子に座りました。男児は、『椅子をもっと遠くに動かせ』と命令し、母親は椅子を遠ざけました。しばらくして、母親が入ってもいいかどうか聞くと、男児は入室を拒否しました。しかし、母親が5分後に平身低頭しながら再び入っていいかどうか聞くと、男児は入室を認め、二人の交流は普通に戻りました。」(Prior & Glaser, 2006) 後者の「統制的一世話焼きタイプ」は、過剰なほどに明るく、行儀よく、援助的に振舞うことによって、自己表出を抑え親を守ろうとしているように見える。欧米では世話焼きタイプが多いが、日本ではあまり見られないという。

このような非組織型の愛着を生み出す養育者との相互作用とはどのようなものか。メインたちは、大きく三つに分類している。①不適切な養育(身体的、性的、心理的虐待とネグレクト) ②怯え/怯えさせる行動; 乳児の視界に急に養育者が入り込む、逆に怖がって子どもから遠ざかる、解離様の状態になる、乳児に従属的な関わりをする、また、無秩序無方向型に見られるよ

うな行動が養育者自身にみられること ③未解決型の養育者と世代間伝達；虐待や喪失といった外傷体験によって非組織型の愛着形成をしている養育者。いずれも、安全な避難場所であり、安心の基地であるはずの場に恐怖がある。

愛着とは生き延びるための仕組みである。D型の子どもたちが、このような恐怖に対し、なすすべなく受け身に怯えていた頃から反転し、なんとか適応しようとした形の一部が上記の「処罰型」「世話焼き型」であるのだろう。臨床的には、D型の愛着スタイルの子どもの全てが幼児期にはっきりと上記二つの適応の形に行きつくのではないと考えられる。多くの場合、適応による学習の結果として、時に回避型、時にアンビヴァレント型の反応を見せながら、養育者の状況によってそれらが破綻した時には、混乱した反応パターンを示すと考えられる。回避型、アンビヴァレント型、統制型が混在した形を示すと考えられる。

以下の事例は、筆者がこれまで出会ったDタイプと考えられた幼児の事例をもとに、個人が特定されないよう部分を変更・再構成した架空事例である。

D型の子どもの行動と心理～架空事例を通して

事例) A太 5歳 年長児

4歳の頃入園。園では、保育者に突然飛びついたりすがりつくが、保育者が抱き返すと、つねったり、笑って逃げる。午睡の時に保育者が近づくと「来ないで」と言う。保育者に次々と要求を出し、諷められると、「死ね」と暴言を吐いたり、「出て行けばいいんやろ」とかんしゃくを起こす。友達との遊びには入っていくが、ささいなことで叩いたり突き飛ばす。転々と遊びを替え、目に入った物にすぐ飛びつき、他児が遊んでいる物を取り上げてしまう。集団遊びには参加するが、ルールを無視したり、途中で抜けてしまうなどマイペースである。

朝、母親とはあっさり別れ、お迎え時も母親と目を合わそうとしない日もあれば、機嫌が悪く、なかなか母親と離れようとする日もある。母親は平板な表情で自信がなさそうな人と保育者には映った。保育者とあまり話そうとしない。母子家庭であり、A太が生まれてから転職と転居を2度行っているという。

その後、本児の行動を心配した園が、就学の際の配慮要請を理由に親子に検査を勧め、児童相談所と関わることになった。聞き取りから、母親自身大きな外傷体験を抱えていた。A太を見ること自体が母親の外傷を喚起した。乳児期はA太が泣いても、泣き声がいっそう母親の不安を喚起したため、放置せざるを得ないことが度々あったと言う。今も時折フラッシュバックや不眠に悩まされていて、気分の浮き沈みがあり、子育てにエネルギーを注げない状態である。

この事例の理解を整理すると、母親には、PTSDおよび抑うつ症状が見られ、自身の症状に振り回され、A太に対して保護的な機能を発揮できていない。母親自身、未解決型の愛着パターンを形成し、息子のA太自身に対し恐怖を喚起される状態である。住環境もところどころ変わった。A太は、乳児期から要求に答えてもらう経験が希薄であったばかりか、母親の自分との関わり

が不安と恐怖を伴うものだったため、安心の輪のもとに安定した愛着を築くことが難しかったと考えられる。工藤（2020）によると、虐待等不適切な養育の経験をもつ子どもたちは、怯えるか怯えさせるかという養育を経験してきており、闘争―逃走的な反応を示さざるを得ないという。温かい安全基地を提供しようとする保育者に対し、接近の気持ちをもちつつも、A太にとってそれは恐怖の前触れでもある。安心したいのに、恐怖への防御反応から保育者との関係を破壊するような攻撃的行動に出てしまうのである。A太には、こうした攻撃性、衝動性がみられ、状況に関わらず身体接触を求めるところは脱抑制型対人交流障害を思わせる。そんな自分と周囲の差に気づいており、自己肯定感の低さがみられる。A太に無秩序・無方向な行動が起こるのは、アタッチメント行動システムの活性化に対して、異なる方略をもたらす複数の内的作業モデルが同時に作動しているため、アタッチメントのニードを表現する際、別の防衛的な行動が、同時にあるいは連続的に提示されていると考えられる。

これらの行動は内的には恐怖に支えられており、基底にある表象は混乱したものである。ソロモンらの研究ではD型の行動を示す幼児の大部分が、“自分や養育者のことを、恐ろしくて予測できない”か“恐れていてどうしようもない”と表現していた（Prior & Glazer, 2006）。統制型の子どもが示す人形遊びは、大惨事や無力感がテーマであったり、遊びを全く示さなかったりという特徴があった。これは、被虐待児の行動特性に関する研究（松本，2018）で示されている内容と一致する。虐待という外傷体験は、再体験を引き起こし、遊びの中で繰り返される。生存のため、つらい体験はいったん凍結され、解離が起きる。虐待を受けた子どもがこのような行動をとる要因には、①愛着形成の困難 ②①に起因する対人関係スキルの未熟さ ③虐待行為そのものから引き起こされる解離やフラッシュバックなどの症状 ④衝動性や怒りなどの抑制の困難さ ⑤暴力による解決をモデリング学習したことによるといった要因によるものである。

集団では、こうした、逃走か闘争か、といった「解決のない恐怖」に基づいて、その場しのぎの対処行動が起きる。その時々行動が予測しづらいものであるため、保育者は戸惑い、子ども同士ではうまくいかず、行く先々で「困った子」と認識されることになる。

5. D型の子どもの保育場面における援助

(1) 保育におけるアタッチメント形成

アタッチメントの形成には、親とのアタッチメントが先行する。親との間に形成されたアタッチメントが、その後に出会う他児や保育者との関係性に影響を及ぼす。その反面、保育者との関係は、家庭における親子関係に不足しているものを十分に補う可能性をもっている。これは、ジェームズ・ヘックマンの行った「ペリー就学全計画」でも明らかになっている。家庭での親子のアタッチメント以上に、早い段階で出会い、ケアをしてもらった保育者とのアタッチメントの良好さが、その後の人生により深く影響することが示唆されている。保育者とのアタッチメントが、家庭での親子関係のアタッチメントを補償することができることを示唆している。

図1の「安心感の輪」は、安定したアタッチメントを形成するうえでの養育者のあり方を示し

ている。保育者は安心基地として見守る存在であることが基本である。子どもから離れて見守り、子どもの自発的な探索行動を促し、かつ子どもが危機に陥った時にはいつでもそこに存在し、受け止めることが求められている。

エインズワースは養育者の「感性」、すなわち、子どもの心身の状態を的確に読み取って、迅速に対応する特質こそが安定した愛着形成を育くむ要素とした。しかし、近年は、「感性」ではなく、養育者を利用する主体としての子どもの目線から見た、養育者の「情緒的利用可能性 emotional availability」が言われるようになってきている。つまり、養育者は常に子どもの状態を気かけながら、どっしりと構え、子どもが求めてきたときに情緒的に応答する存在であればよい、ということである（遠藤，2017）。情緒的利用可能性の養育者側の要因として、「敏感であること」「侵害的でないこと」「環境を構造化すること」「情緒的に温かいこと」の4つがある。過剰な読み取りや大人中心の侵襲的な関わりを行ったり、無反応でいたりせず、子どもがすることを見守りながら、子どもが振り返った時に笑顔で受け止め、認める関わりこそが子どもを安定させる、ということである。遠藤（前掲）は子どもの気質や興味、発達を促進する構造化された環境、温かい情緒の雰囲気のもと、危機状態ではない子どもに対して侵害的でない関わりと、困ったサインにタイミングよく敏感に応える関わりがバランスよく成り立っている時、子どもの発達は最も促進されるとしている。特に、自律性や社会性といった非認知的能力は、こうした条件のもとで培われていくとする。

集団生活の場である園では、「子ども一人ひとりの気持ちを汲み取って素早く的確に」応答するといったような、二者関係に関連した感性だけでなく、子ども集団全体に対する共感性や許容性、構造化といった、集団生活に関連した感性が求められる。

(2) D型の子どもの保育

D型、非組織愛着型の子どもの保育および援助においては「安心感の輪」を基本とすることに変わりはない。しかし、Dタイプの子どもはそもそも組織化された対処方略をもっていないため、温かいはずの保育者の態度に対してもさまざまな矛盾する行動をとろうとする。そこで、もう一步突っ込んだ認識と工夫が必要となる。

アタッチメントの本質は「安心感」にある。支援を考えるうえで、それが子どもにとって「安心と感じられるかどうか」がもっとも重要なポイントとなる。子どもが不安な時、「今誰にくっつけばいいのか」という見通しが立つことが大切である。3歳未満児の場合は、多くの場合、複数担任で保育が行われる。通常は、子どもが危険を感じ安心感を求めた時、担任のうち対応できる保育者がその都度応じてあげればよい、と大人は考えるが、子どもにとっては、「誰がいつ」ということがわかっているほうが、安全への見通しを立てることができる。「この時、この場では○先生が応じてくれるはず」という予測が成り立つよう配慮することが大切である。

次に、Dタイプの子どもの対応において有用と考えられるのが随伴的・有標的な応答（有標的ミラリング）である。愛着が不安定な子どもの内的作業モデルにおいては、周囲の世界は警戒すべき恐ろしい人がある危険な場所として表象化されている。自分自身は、効力を発揮できず、愛

されるに値しない人として表象化されている（上地，2015）。子どもが闘争か逃走かといった恐怖状態にある時は、その体験から離れてその状態を意識的に想起することは難しい。しかし、養育者が子どもの情動を読みとり、その状態を子どもに伝える随伴的・有標的ミラリングを繰り返すと、そこに映し出されている情動の内的手がかりに対する子どもの感受性が増し、その情動が認識されやすくなる。上地は、有標的ミラリングのわかりやすい例として、赤ちゃんをあやす母親を描いた4コマ漫画を引用して説明している。激しく泣く乳児に対し、母親は「よしよし、けんちゃんは怒っているのね」「わかるよ、けんちゃんの気持ち。お母さんもそういうことあるもん」「大丈夫だよ、お母さんがこうして抱っこしてあげるからね」と伝え、抱っこ笑顔を示している。遠藤（2017）の紹介する保育園の事例でも、不安が大きく自傷行為を行う幼児に「そうだね、悲しいね」と感情に共感し言葉にする事例や、引き戸を大きな音を立て開け閉めしては保育者の反応をうかがう「試し行動」に対し、「バーンってしたいの?」「大きな音がするね」など、行動に伴う子どもの気持ちをイメージしながら言葉かけを行っている。子どもの状態に波長を合わせ、子どもの状態と似た心身の反応を体験し、それについて内省し、それが子ども側の感情なのだとわかる手がかりを添えて（有標性）、子どもが利用可能な表現で伝え返すのである。そうすると、子どもは、自分の感情状態のイメージを内在化し、外にある危機ではなく、自己状態の表象を形成する。この表象は、自己の感情状態を表す二次的表象として活用できるようになる。このような表象が増えていくと、心理的自己が体験されるようになる。

「そばに寄っても怖くはなかった」「心地よかった」という体験は修正感情体験となって、子どもの「愛着を向ける対象は恐怖をもたらす」という内的作業モデルの更新が行われるとする。

最後に、保育者側の逆転移の問題である。常に温かい関わりを行っても、攻撃や拒絶が起こる。それは保育者自身のアタッチメント行動システムを刺激する。これだけやっているのに、子どもはなぜ応じてくれないのか。この時、思い出すべきは、混乱しなすすべなく感じているのは子ども自身である、ということである。問題行動は、それまでの生育環境に対する適応の結果、あるいはその副産物である。保育者自身が、その感情に気づき、そうした行動に表された、子ども自身にとっての困難に目を向ける必要がある。

6. 今後の課題 ～結びに代えて

愛着理論は第二次世界大戦の混乱でヨーロッパ中の遺児やマルトリートメントが社会問題となって以降、発展を遂げてきた。ボウルビーが愛着理論を提唱した頃、イギリスの精神分析・心理学界は、精神分析と行動療法の2大潮流の発展期にあり、受け入れられなかった。愛着理論は、子どもが養育者にくっつくのは、学習の結果でも深層の欲動からでもなく、ヒトとしての生得的反応であるとした。当初は乳幼児の精神衛生の問題解決からスタートしたボウルビーの着想から、エインズワースの「安心感」の概念を軸に発展し、主に発達心理学と社会心理学の、二つの領域で活発に拡大してきた。20世紀をかけて、ミネソタプロジェクトやNIHCといった大規模な研究が行われ、乳児期から成人期までを漸進的に追いながら、乳児期の愛着形成が、成人期

の発達にどのような影響を与え、また、各種心的機能や能力の発達にどのような影響を与えるか、といったことが研究された。その知見は社会的養護や政策にも取り入れられてきた。アダルト・アタッチメント・インタビュー (Adult Attachment Interview: AAI, George et al.,1996) といった SSP 以外のアタッチメント尺度が開発され、1990年代になって臨床的適用が模索され始めた。2000年代に入って、COSプログラム (Circle of Security, Hoffman et al.,2006; 数井, 2012) をはじめとする養育者への介入プログラムが開発・実践されるなど、臨床適用が本格的に始まった。

愛着理論は、タイプ論である点に魅力と限界がある。近年、イギリスの新しい精神分析の潮流が愛着理論を取り入れて、メンタライジングアプローチとして発展している (Fonagy.P., 2008)。今世紀の精神分析や精神療法と再び邂逅し、決してタイプ論で割り切ることのできない臨床適用においてこの限界を乗り越えようとしている。成人期の PTSD 治療、薬物依存症者の治療、小児科医療といった分野での応用が期待されている。保育領域についても同様に、これまでの保育領域の実践に資することが期待される。

【文献】

- Bowlby.J (1969) Maternal Care and Mental Health.Geneva;World Health Organization.J. ボウルビィ／黒田実郎ほか訳 (1976)『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎学術出版社。
- Bowlby.J (1979) The Making and Braking of Affectional Bonds.London:Tavistock Publications. 作田勉 (監訳) (1981)『ボウルビィ 母子関係入門』. 星和書店。
- 遠藤利彦 (2017)『赤ちゃんの発達とアタッチメント』ひとなる書房。
- Fonagy.P (2001) Attachment Theory and Psychoanalysis;London; Other Press. P. フォナギー／遠藤利彦・北山修 (監訳) (2008)『愛着理論と精神分析』誠信書房。
- 上地雄一郎ほか訳 (2019)『メンタライジングの理論と臨床—精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合』北大路書房。
- 上地雄一郎著 (2015)『メンタライジング・アプローチ入門—愛着理論を生かす心理療法』北大路書房。
- 工藤晋平 (2020)『支援のための臨床的アタッチメント論』ミネルヴァ書房。
- 松本真理子 (2018)「身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーにおけるセラピストの体験に関する研究—治療的アプローチの志向性との関連において」梅光学院大学論集。(第52号, 59-71頁)
- 奥寺崇ほか訳 (2019)『精神力動的精神医学—その臨床実践 第5版 (DSM-5 準拠)』岩崎学術出版社。
- Prior.V & Glaser.D (2006) Understanding Attachment and Attachment Disorders.The Royal College of Psychiatrists 加藤和生監訳 (2008)『愛着と愛着障害』北大路書房。
- 数井みゆき編著 (2012)『アタッチメントの実践と応用—医療・福祉・教育・司法現場からの報告』誠信書房。
- 橋本泰子著 (2004)『虐待児の心理アセスメント—描画からトラウマを読みとる』ブレーン出版。
- 帆足暁子著 (2019)『0.1.2 歳児 愛着関係をはぐくむ保育』学研教育みらい。